

◆ あれから10年 ◆


毎年、母校の研究室でOB会が開催されているのだけれど、去年はCOVID-19の影響もあり中止となっていた。2年振りとなる今年の会は、リモートで実施するとの連絡があり、その際何か話をして欲しいとの依頼があった。後になって送られてきたプログラムを見ると「ご講演」などと書いてある。何を話そうかと思い巡らせてみたが、ちょうど10年前、今の日々同様、当たり前だと思われていた日常を見直さざるを得なかった「東日本大震災」を主題にしてみようと考えた。

当時、県の教育委員会で文化財の仕事をしていた。地震発生時の県庁21階での状況を忘れることはできない。高層建築でのそういった場面での話は聞いていたけれども、現実には想像をはるかに超えたものであった。

その日を境に、日常は大きく変わった。

意外と知られていないことかもしれないけれど、茨城県内の国関係文化財の被害は182件で、全国で最も多い（東日本大震災による被害情報について（第208報））。連日、文化財の被害状況を調査する日々が続いた。文化庁の調査官とともに現場に足を運ぶ。気が滅入ることも多かったが、少しずつ本当に少しずつではあるが、多くの方々の手を借りて元の姿に戻っていく。

このようなこともあり、復興の途上ではあったが、文化庁と日本建築学会が中心となって事業化した「文化財ドクター派遣事業」報告会で、母校の先生とともに話をする機会を得た。

現在は、大手ゼネコンが文化財建造物の修理等も手がけるようになっている。研究室からも、
 少くない卒業生が建築関係の職に就いている。少しは彼らの参考になっただろうか。
本校卒業生からも、このような文化財建造物の維持・保存等で活躍できる生徒が出てくることを期待するとともに、何の心配もなく文化財を愛でることができる環境が一日も早く戻ってくることを祈ってやまない。

（「さげえ堂」形式で知られる県指定文化財・長禅寺三世堂（取手市内））